

土に還る(2)浴衣の一生

エッセイ 大江戸エゴ帖
◆第七回◆

文／石川英輔

着物を着る機会がすっかり減ったが、今でも夏の間に浴衣を何度か着る人はかなりいるのではなからうか。浴衣はもともと湯上がりの汗を取るためのタオル代わりのような衣服、麻の「湯帷子」だった。ところが、江戸時代になって一般庶民でも木綿の着物を普通に着られるようになると、湯帷子に大きな変化が起きた。

まず、材料が麻から木綿に変わったばかりか、湯上がり用だけではなく、夏の夕方以後の外出にも着るようになった。呼び方も、湯帷子を略した浴衣が一般化し、さらには木綿のもの一重の着物一般を浴衣と呼ぶようになった。

染め方もしだいに複雑になり、好みや身分、職業、年齢に合わせてさまざまな模様を染め出す高級化が進み、タオル代わりどころか、独立した略式の衣装に進化した。浴衣の色あいは藍色両面染めの「中形」が好まれたが、

図版 藤と蝶を染め出した華やかな浴衣を着た湯上がりの女性。印刷の工程で浴衣の部分にこまかく凹凸がつけてあるので、総絞りのつもりなのだろう。「北雪美談時代鏡」より

芸者などの芸能人には派手な模様を染め出した有松名産の総縮みを着る人もいた。

だが、どんなに華やかにしたところで、浴衣は木綿製品である。着続けているうちに張りがなくなつて外出用には着にくくなるが、寝巻としてはこの方が着やすいため、寝巻に転用する家が多かった。私自身、二十歳代までは着古した浴衣で寝ていたものだ。

寝巻として着続けると、木綿地はさらに柔らかくなり一部がすり切れるほどになる。ここまでくれば衣服としての寿命がほぼ終わるが、かつては古浴衣を赤ちゃんのおしめとして使うのが普通だったから、古浴衣をとってにおいて赤ちゃんが産まれた親戚知人におくつたりした。昭和三十年代あたりまでは、住宅地を歩くと藍染め模様のついたおむつが干してあるのをよく見かけたものだ。



時代加賀見

木の上の鳥

上編七十

洗っては使うのを繰り返したおむつは、ついにはおむつとしても寿命がくるが、まだまだ浴衣の寿命は終わらない。適当な大きさに畳んでから糸で縫いあげて雑巾にした。針仕事の初心者が運針の練習をするのに雑巾を縫うことが多かった。だが、雑巾として使い込んでぼろぼろになつても、まだ古浴衣の用途はあった。

乾かしてかまどで燃やしたのである。その灰は肥料となり、CO₂となって大気中に散った一部は、また畑で綿花として生まれ変わった。

いしかわえいすけ
作家 著書に、江戸時代の資源やエネルギーの循環について紹介した「大江戸リサイクル事情」大江戸えねるぎ「事情」などがある。

廃タイヤを再利用したサンダル



ゴールドウインカスタマーサービスセンター(電話:0120-307-560) <http://www.goldwin.co.jp/simple>

だんだん気温が高くなつてきて、そろそろ足元も涼しく過ごしたい季節がやってきました。この夏、サンダルを探している方にぜひおめなのが、「Simple U.F.Toe」。靴底は廃タイヤを再利用し、その他の部分はヘンプやバンブー、天然ゴムなど、環境への負荷をできるだけ少なくする天然の素材を使用しています。ナチュラルで、デザインもかわいいサンダルで、足元からエコなおしゃれを取り入れてみては?

ごみ置き場が、アートに変身!



マック(電話:03-5411-2646) <http://www.maq.co.jp/gba>

青い海や真っ赤な花畑、緑の森……。ごみ置き場に出すだけで、アートが生まれるごみ袋があるのを知っていますか? ごみを出す、という普通ネガティブにとらえがちな行動を、アートにすることでクリエイティブにしまおう、という「GARBAGE BAG ART PROJECT」。町の景観が変われば、ごみに対する意識も変わってくるはず。袋がもつたないから、ごみの量も少なくていいかも!?

エコモノたちで、あなたの暮らしを彩りあるものにしてみませんか。

エコモノ

クスノキの力で、虫をシャットアウト



神社や公園などでよくみる、クスノキ。この木は、古くから「虫除けの木」として知られてきました。クスノキの自然の香りを活かした、KUSU HANDMADE ECO BLOCKは、切り出しの端材を再利用して作られた防虫・アロマグッズです。消臭効果、リラクゼーション効果もあり、積み木のようなかわいらしいルックスなので、お部屋にさりげなく置いておくことができます。

株式会社中村(電話:0952-34-6055) <http://kusuhandmade.com>